冬至粥

松岡隆子

冬立つや怒濤の白さ目に余し

父の忌の十一月の海の前

四囲枯れて運河に雨の降り込める

土砂降りの後の青空鳥渡る

いつ時の夕日に濡れて冬紅葉

隆々と松の走り根神の留守

夜も白き雲の流れて神の旅

薔薇一本買つて勤労感謝の日

悼・小山陽子さん

冬薔薇の真白き翳り人の亡く

くれなゐはかなしびのいろ冬薔薇

病む夫の素直がさびし冬至粥

考への端を木の葉の降りしきる

　縹集同人の小山陽子さんが十二月四日に逝去された。このところ体調を崩されていたが、またお元気になられて句会をご一緒できるとばかり思っていたのにまことに残念である。〈茎青きまま鶏頭の花をはる〉。遺作となった本号の作品はどれも心に沁みる。心よりご冥福をお祈り申し上げる。

　異常気象の所為か庭の千両が早くから色付き、しかも今までになく増えて燈籠のあたりまで迫り出している。母が亡くなった年は一粒も実らなかったことを思い出しながら仏花に添えた。新しい年が佳き年となりますよう！